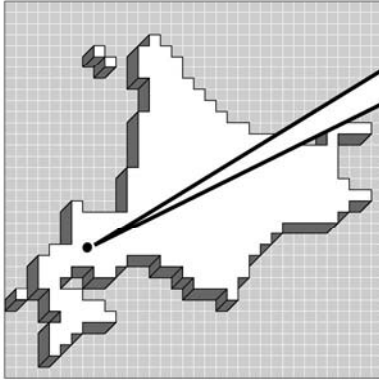


連載 わがマチの自慢 No.4



ニセコ町

—羊蹄山と
ニセコアンヌプリを
眺めて—



(ニセコ町市街)

わがマチの自慢第四回は、ニセコ町を取り上げ、暮らし良さ、住み心地をテーマに紹介する。

1. 人口増加率北海道第三位

二〇〇五〜二〇一〇年の五年間において、ニセコ町は北海道三番目の人口増加率三・三%をしめしている。本年の日本創成会議（座長：増田寛也東京大学大学院客員教授、元総務相）の人口減少問題検討分科会の公表内容（二〇〜三九歳の女性の人口減少率を推計し、人口予測をする）によると、消滅を予想される自治体が数多くある中、特徴的な統計数値である。

人口増加率第一位の京極町（六・四%）は北海道電力（株）・京極発電所工事期間における一時的増加、第二位の音更町（六・二%）は近年宅地開発が進み、帯広市のベッドタウンとして増加している。これに対してニセコ町は羊蹄山、ニセコ連峰に囲まれ、景観、空気、水などの自然環境が魅力あふれ、冬はスキー、夏は各種アウトドアスポーツを軸とした観光資源が一つの誘因となり、比較的若い子育て世代やリタイア後の移住者、外国人居住者が増えている。普通出生率（人口

千人に対して子どもが何人生まれたかという数値)においても、ニセコ町は平成一九年七・六(北海道全体七・七)から平成二四年一〇・八(北海道全体七・一)と急激に増加し、子どもの数が増えており、年度により増減はあるものの小学校、中学校の学級数が増加傾向にあるとのこと。

また、平成二二年度国勢調査結果をもとに平成三七年の人口推計を行うと、在住外国人を含み、対平成二二年比十二・二五人、十四・七%の五、〇四四人となるとの見通しである。

ニセコ町の人口増加率が高い理由を以下に探ってみよう。

2. 豊富な観光資源

ニセコ町は羊蹄山、ニセコアンヌプリ、昆布岳に囲まれ、その景観は圧巻である。パウダースノーと評されるスキー場の数々、点在する泉質別個な温泉、清流、森林など自然環境に恵まれ、リゾート地、観光地としての資源は豊富である。

国際的なリゾート地としてニセコ町が

注目されだしたのは、オーストラリア人スキーヤーが訪れだしたのがそもその始まりとのこと。オーストラリア人スキーヤーは自国のオフシーズンに雪を求めカナダへ出向いていたそうだが、同じ北半球のこのニセコ町を訪れたあるオーストラリア人がニセコの雪質に魅了され、距離的にも近いニセコ町が彼らの間で口コミで広がったそう。こうして近年、オーストラリア人をはじめ、東南アジア



ゲレンデから羊蹄山を望む



ラフティングを楽しむ観光客

など外国人にも注目される冬のリゾート地として評価されるようになったのである。町では国際的なスキーリゾートから通年型の国際リゾートへの脱皮をめざし、現在、商工観光課にニュージブラント、スイス、英国、中国、韓国の各国籍を持つ人たち五名を職員として採用し、外国人居住者、観光客対策として対応にあたっている。

また、ニセコ町は新千歳空港、札幌な

どからのアクセスの良さも観光地としての評価を高めているが、今後、新幹線の駅が俱知安町にでき、札幌からの高速道路が俱知安町まで伸びることで、アクセスの良さがさらに増し、この点もニセコ町の魅力の一つとなろう。

ここでは移住の地として、新たな人生の営みのために、あるいは自らを磨く場として、ニセコを選んだ人たちの言葉（以下、「ニセコものづくり人」(企画/発行ニセコ町商工観光課)というパンフレットより抜粋)を紹介し、ニセコ町の魅力のイメージを湧かせていただこう。

「ニセコ町に自宅を構えた理由は、都会の息苦しさから抜け出すこと。そして、懐かしさを感じる自然があり、気候の良さがあるからだ。」(パン舎花地蔵・井上剛さん)

「ニセコの牛は一頭一頭の性格を踏まえて育成されています。ストレスが少ないことで乳質が良く、チーズづくりには最適なんです。」(ニセコチーズ工房・近藤孝志さん)

「ニセコを選んだのは、最高の水があ

るからです。ソーセージをつくる時、良質の水が必要なんです。そしておいしい野菜があるから。」(レストランシェーンベルク・村岸弘さん)

「ニセコを選んだのは、いろんな場所を調べて、観光資源が北海道内で一番豊富だから。スキーの雪質は最高だし、羊蹄山がすばらしい。他にもゴルフはできるし、川下り・ラフティングも楽しめる。温泉も豊富。ニセコを選んで一九年経った今でもその判断に間違いはなかった。」(ニセコ燻製工房・小川孝男さん)

「ニセコの豊かな自然は気持ちよのびのびとさせてくれる。自分を磨くためには最高の場所」(書家・小貫烈快さん)

3. 町の二大産業

人の流入を促すためには雇用の場、産業が必要である。ニセコ町の二大産業である観光を中心としたサービスマス業(飲食店・宿泊業、その他サービスマス業)及び農業について見てみる。

まず、サービスマス業については、平成二二年に町の就業人口の七割を占め、サー

ビス業の雇用需要が安定的にあり、移住者の職を支える好循環をもたらしている。観光客入り込み数は、ここ二〇数年来微増傾向にあり、平成二三年に震災の影響により一時的に減少したが、現在は回復している。季節変動で見ると、平成一年から夏と冬の入り込み数が逆転し、かつてのスキー場中心だった観光に変化が生じ、夏はハイキング、トレッキング、ラフティング、ゴルフなどアウトドアスポーツが取り込まれ、夏冬通年の入り込みがあるという近隣にはないニセコ町の強みがあらわれている。

平成二五年度の観光客の内訳は、道内客七六五千人に対し、道外客八〇五千人、日帰り客一、二〇二千人、宿泊客三六八千人、総入込客数一、五七〇千人である。外国人宿泊延数は約一〇九千人となっており、香港、韓国、中国、台湾などのアジア、オーストラリアから来訪してきており、為替変動の影響があるものの、今後とも増加が予想されることである。次に農業については、農業就業人口は他地域と同様、減少の一途を辿っており、平成二二年において耕地面積は二、八一

〇ha(ここ一〇年の減少率二・四%、経営耕地面積では微増)、農家戸数一五〇戸(H一二年比三五・三%減)、農家人口五八八人(同四八・三%減)である。町は第六次農業振興計画(平成二六〇三年度)を策定し、町の基盤産業を後押ししようとしている。策定の方向付けとして、今後一〇カ年計画で着工する国営緊急農地再編整備事業を重点とした各種生産基盤の整備や担い手への農地利用集積を進め、後継者や新規参入など多様な新規就農者の育成支援体制を整備すること。施策としては、良質な農畜産物の安定的な生産・供給をはじめ、地場



ジャガイモ畑

産品の地域ブランド化、加工化・六次産業化の支援とともに農村環境の観光資源化など観光と連携した地域産業の創造を進めるとしている。町においては、観光地として農畜産物の地産地消を完結させることが重要課題とのことである。

4. 魅力的な町づくりへ

「ニセコ町は、平成一三年四月に自治基本条例となる「ニセコ町まちづくり基本条例」を全国で初めて制定した。中央依存を脱却し、地方分権時代に対応するため、町政の政策形成過程における住民参加制度の保障を柱とする。情報共有しながら、住民と行政が自治を進める画期的な指針。現在は、住みよいまちづくりを目指した各種施策が展開され、町民主体のまちづくりが進んでいる。みな

がよりよい暮らしができるよう、新たな探究心でまちづくり活動を進めている。」(ニセコ町観光ガイドより)

ニセコ町では、まちづくり町民講座、まちづくり懇談会などを定期的に開催しており、このような誰もが町政に参加できる、町民主体の自治は、風通しの良いまち、住みやすさとなり、ニセコに移住する際の一つの要素になったという人もいる。また、平成一六年の内閣府の調査では、ニセコ町は参考にした自治体的一位であったことから、住民ばかりではなく、他の自治体からも注目されていることがわかる。

町民参加によるまちづくりは多方面にわたり数多くの実績をあげているが、中でも住民アンケートの結果、評価が高いのは、道の駅「ニセコビュープラザ」、学習交流センター「あそぶつく」などであるとのこと。

道の駅「ニセコビュープラザ」は国道五号と道道岩内洞爺線が交差する所に位置し、「情報プラザ棟」「フリースペース棟」「トイレ棟」の三棟からなっている。ゆつたりとしたスペースにはニセコ観光のための情報が充実しており、観光の準備にも好適。フリースペース棟には、特産品のジャガイモを使ったファースト



ニセコビュープラザ



あそぶつく

フードショップや地元ミルクを使ったソフトクリームがあり農産品の直売を行っている。

ニセコ町では、情報共有化とコスト削減のため、文書は一つとし、担当がいなくても、誰でも書類がわかるように、三〇秒以内に出せる最先端のファイリングシステムを取り入れた。このシステムの特徴は、「私物化の排除」「即時検索」「他者検索」である。一、二年目の文書

は役場のキャビネット、三年以上経過した文書は学習交流センター「あそぶつく」に図書とともに保存している。この図書館は、二年間かけて町民と行政が一体となった検討委員会で案を練り、旧郵便局舎を改修・増築し、平成一五年四月にオープンした住民自慢の施設である。運営は町民によるNPO法人「あそぶつくの会」（会員数八九名）が行う。住民組織の運営のため、柔軟かつ町民の目線

に立つた運営と、人件費などのコスト削減につながっている。同時に社会教育の機能も担い、町民に評価、期待される存在となっている。

このニセコ町まちづくり基本条例前文には、「相互扶助」という言葉が使われており、農場開放を行った有島武郎の人間愛に基づく「相互扶助」の精神が根底にあると公言する人もいる。

〈取材後記〉

記者は四〇年近く前、学校卒業後就職した最初の任地がニセコ町の隣、倶知安町であった。若い頃は、この羊蹄山麓の環境の素晴らしさやここで暮らすことの有難味さえ分からなかったような気がする。年齢を重ね、人生の営みの視点を多少持ち合わせた今、何ともつたいない日々を送ったのだろうと悔やむ。

今ニセコ町には、その素晴らしい自然環境に加え、その自然の魅力に集まった人たちと一緒にあった自治の創造という新たな魅力があった。

一般社団法人 北海道地域農業研究所
特別研究員 西野義隆